

「国語表現」の学習指導

——60年度の実践記録と反省——

斉藤真子 高木 徹

1 まえがき

本校での「国語表現」の指導も2年目を終えたところである。59年度においては、全く手探りの状態から試行錯誤的な取り組みを行ってきたが、60年度では、前年度の成果と反省を生かしながら、大筋においては59年度の指導方針に則って、さらにそれを改善して行く方向で指導を進めた。(59年度の取り組みについては、本校紀要第30集参照)。

60年度も高校3年の生徒全員を対象とし、週2時間の授業を行った。指導体制としては、前年度同様、3名の教師が、A・B・Cの3学級を1名1学級ずつ担当した。(A組=酒井, B組=斉藤, C組=高木)。

2 60年度の指導方針

(1) 「現代文」との違いを明らかにする。

59年度の実践では、文章読解的な要素を授業の中に残していたため、「現代文」の授業と「国語表現」の授業とはどう違うのか、という疑問を持つ生徒もいた。その一因として、各社の教科書の中でも「現代文」と性質の似通った(逆に言うと、「国語表現」的色彩を強く出していない)角川書店のものを使用したことも考えられるが、60年度も同じ教科書を使用することになっていたため、できる限り文章読解の授業は避けるということで、「国語表現」という教科書の性格・目標があいまいにならないように努めた。実際に文章読解の授業を行ったのは、教育実習生による授業と、後述べる「生徒による授業」くらいであり、教師が行う授業としてはほとんどなかったと言って良い。

(2) 文章を書く時間を、授業の中で十分に保証する。

一つの文章を書き上げるのに、十分な時間を与えたのは、量より質を考えたからである。文章を書かせる回数が多い方がいいに決まっているが、生徒の文章を添削し指導して行く教師側の能力を考えるならば、1学期間に2,3回が限度である。そういうわけで、文章を書かせる回数は前年度並みにして、質的な充実をめざした。具体的に述べると、一つの文章を書き上げる際には、次のような

(構成メモ→)下書き→推敲→清書
という手順を追って行った。推敲の段階では、自分で

見直すだけでなく、必ずクラスの仲間に見せてその批評を聞くように指導した。こうしたやり方のいいところは、最初は下書きということで文章を書くのが苦手な生徒も気楽に書き始められる、推敲を経ることで文章がかなり良くなる場合もある、初歩的な誤字・脱字などは友人の指摘で訂正され教師の添削が少しでも楽になる、などである。

(3) 人前で話す機会を多くする。

59年度に引き続き生徒全員がスピーチを行った。そして、スピーチが終わった後は、「研究発表」という形で生徒による授業を行った。

(4) 前年度の資料を積極的に活用する。

文を書いたり、スピーチをしたりする際に、身近な人の例があると生徒も取り組みやすいのではないか。そこで60年度は、前年度の生徒が行ったものを積極的に活用した。4月当初には、前年度の作文の添作例をいくつか印刷して配り、スピーチを始める前には、録音してある前年度のスピーチを聞かせ、夏休みの課題として手紙を書かせる際には、前年度の優秀作のコピーを配布するなどして、生徒の参考に供した。

3 60年度、年間指導の記録

(1) 1学期

① 日記(400~800字)を書く。並行して、教科書の高見順「敗戦日記」を読む。

② 硬筆書写。――教科書の樋口一葉「塵の中」。

③ 中間テスト。作文「私の長所と短所」(360~400字)。

④ 教育実習。教科書の横光利一「蠅」の読解。

⑤ 要約の練習。――朝日新聞コラム「天声人語」。

⑥ 期末テスト。要約と感想。――朝日新聞社説「『成人の日』の意味」(要約300字, 感想100字)。

⑦ 手紙の書き方の指導。

⑧ スピーチ。(1学期後半から2学期にかけて、⑤・⑦・⑩などと並行して行う。)

(2) 夏休み課題

⑨ 手紙(便箋3枚以上)を書く。

(3) 2学期

⑧ スピーチ。

⑩ 小論文(500字~650字)を書く。これを中間

テストに代える。

① 研究発表。

② 期末テスト。作文「私と名古屋大学教育学部附属高等学校」(500字～650字)。

③ 研究発表。

(4) 3学期

① 研究発表。

③ 学年末テスト。「国語表現」の授業に対する感想・意見(400字以上)。

年間指導の大きな流れとして、話す方では、自分の選んだ話題で自由に話すスピーチから、ある教材について自分が考え調べたことを基に授業を行う研究発表へとという方向で指導した。また書く方については、身近な題材で書く作文的なものから、小論文へとという方向を考え、その橋渡しとして論説文の要約を挿入した。

以下、①～③について順次説明して行く。

① 前年度も日記を書かせることから始まっているが、前年度はいきなり日記を書かせたのに比べて、60年度は、まず前年度の例を印刷して配り、それから下書き→推敲→清書と時間をかけて行った。4月のある一日の出来事を日記として書かせたが、だらだらと書かずに、何か一つのことに的を絞って書くように指導した。推敲の段階では、推敲の際に気を付けるべき点をプリントして配った。(資料1)そして、清書の中から代表的なものを選び、それに添削を施し、下書きとともに印刷して全員に配り(資料2)、これから一年間どういうことに気を付けて文章を書いたら良いか解説した。

② 樋口一葉の日記「塵の中」を読解教材として取り扱ったのでは生徒が授業に乗ってこないだろうと思われたので、原文(900字程度)をそのまま原稿用紙に書き写させることを試みた。コピー全盛の時代にあって、美しい文章を書写する機会を与えるということには、何らかの意味があるのではないか。それから自分の周囲の人のと見比べながら書いているので、脱字があったり、原稿用紙の使い方に誤りがあったりすれば、自分でどこがおかしいと気付く点でも良かった。生徒は意外なほど真剣に取り組んでいたが、学年末の感想を読むと、賛否両論出していた。

③ 出題は59年度の間テストと同じ「私の長所と短所」で、50分の試験時間の中で、360～400字という字数制限で行った。生徒の作品例を一つ掲げる。

私の長所と短所 高3C男子

長所、短所とは言っても、容姿、性格、環境等と幅広く考えることができると思うが、僕は自分の性格にしぼって考えたいと思う。

まず性格における長所、短所を自分なりに定義してみたい。僕に言わせれば、人の性格とは、ど

れが長所でどれが短所と断定できないと思うのだ。例えば、僕は元来短気であるが、他人に迷惑をかけるときはそれは短所であり、いかりが自分に向けられた時、それは自分を戒めてくれる大きな長所となる。もう一つ例をあげると、“やさしさ”という性格があるが、長所にあげられることがほとんどだと思う。でもその“やさしさ”が、友情、愛情から生まれたのではなく相手に与えた“やさしさ”がまた、何かの形で自分に返して欲しいという下心があればそれは短所である。

僕にとって性格にかぎって言えば、すべてが長所であり短所である。しかし、大半の性格は短所に傾いているようだ。そういった性格をどんどん長所として生かしていきたい。(原文は縦書き)

この時の評価は、A～Dの4段階で行い、大よそ次のような基準を定め、生徒にも答案返却の際にそう説明した。

D ・字数の不足または過多。

・漢字・言葉づかい・原稿用紙の使い方の誤りが目立つもの。

・段落分けがなされていないもの。または、むやみに改行をしているもの。

C ・BとDの間。

B ・これといった大きな誤りがなく、構成もしっかりしていて、全体のまとまりがあるもの。

A ・Bの中で特に内容のすぐれたもの。

④ 59年度に同じ。

⑤ 期末テストでは文章の要約をさせることを予告し、その練習をさせた。朝日新聞朝刊のコラム「天声人語」を使い、まず段落ごとに要約し、その中から重要な段落を選択して全体の要旨をまとめるという作業を行った。このような文章を分析して行く手順を学ぶことが、逆に文章を構築して行く上で何らかの手がかりになるのではないかと考えている。

⑥ 59年度においては、9月に新聞の社説の要約文を書かせているが、60年度は、要約文を2学期に行う小論文の前段階と考え、授業の中での要約の練習(⑤)を踏まえ、やはり新聞の社説の要約文を期末テストとして出題した。評価をする際に、要約文だけでは差が付けにくいかもしれないということで、300字の要約に加えて、100字の感想を書かせた。

⑦・⑧ 59年度に夏休みの課題として書かせた手紙が、生徒の間でもかなり好評であったので、60年度も同じように実施した。学年末の感想でも、「手紙の書き方を習えたことはとてもよかった。」という声が多く、本校の「国語表現」の一つの柱として定着して行くのではないかとと思われる。手紙の書き方は、1学期末に

手紙の書き方に関する資料や、前年度の手紙の中で模範的なものを印刷して配り、それらを基にして説明した。そして、夏休みの課題として、「国語表現」の担当教師にあてて便箋3枚以上の手紙を書くように指示した。(資料3)ほとんどの生徒が真剣に取り組み、教師から見ると授業に対してあまり熱心ではないと思われる生徒も、「人に聞いている、何度も書きなおして、一通書くのが苦勞でした。」という感想を述べている、次に60年度の手紙の例を二つ掲げる。(原文は縦書き)

高3C男子

拝啓

蒸し暑い日が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。私は蟬の声に励まされて元気にやっています。

さて、夏休みも半分以上過ぎ、焦りの色も濃くなってきました。高三の夏ということで今までとはまったく違った心構でこの夏休みにのぞんだはずなのに、思うように力をつけることができませぬ。確かに、この夏、多くを得ることができました。しかし、それは小さな取るに足らないもので、私を大きく変えることはできなかったようです。人を大きくするのは、苦勞だけです。私には、それが致命的に欠けています。

この高三の夏は進路を決めなければなりません。目的を持って生きている人を見ると、その生き生きとしたものに、うらやましいという感じを受けますが、私は、今までそれらしきものを所有したことがありません。ただその時、その瞬間を大切にしたいと思ったからで、その理由は、目的を持つことによって、他の可能性をも自ら排斥してしまうことに畏怖したからです。しかし、この時期、当用の進路は決めなければなりません。

こんなことを書いていると、中三のとき渡されたある詩を思い出します。それは真壁仁の「峠」という詩で、

峠は決定をしいるところだ。

峠には訣別のための明るい憂愁が流れている。

という書き出しでした。あの時もある程度感動したから、今でも憶えているのだと思うけれど、実際その峠に立とうとしてみても、やはり中三の時とは違った感慨があります。それは、やらなくてはならないという気持ちと、それに対する疑問です。どちらも夏休みを通し拡大してきたわけですが、後者の方がより強く心の内を占めるようになりました。それは決して怠惰や諦めの気持ちから来たものではありません。

とにかく、その疑問を含め、あらゆる課題に対し、それに挑んでいきたいと思えます。

敬具

八月二十日

〇〇〇 〇

高木 徹先生

高3C女子

拝啓

毎日うだるような暑さの中、先生はいかがお過ごしですか。私は、暑さにも負けず元気に過ごしております。

さて、夏休みももう二週間が過ぎましたが、私にしてみればまだ二週間しか過ぎていないのかという感じがいたします。夏休みがこんなに長く感じられるなんて今までは考えられませんでしたし、まだあと一カ月もあるのかと思うとぞっといたします。その反面、私はある美術研究所に通っているので、普通の受験生より勉強する時間が少ないわけです。ですから自分が絵を描いている間にみんなが勉強しているのかと思うと、気があせってしまい、もう二週間も過ぎてしまったのかという気もいたします。

受験勉強が辛いものだということは、ちょうど三年前、姉が高三だったのでよく知っておりましたが、こんなにも辛いものだとは思っていませんでした。勉強するというだけでも大変なのに、私の場合絵も描かなければならないのですから、自分でも大変な道を選んだなあと思っております。

私がこの道に進もうと決心したのは、実は最近のことなのです。高一の時は美術系の大学に行きたいとは思ってもいなくて、全く別の方面へ進みたいと考えていました。ただ、小さい頃から絵を描いたり、ものを作ったりすることは好きでした。しかし、高二になって、ほんとうに自分がやりたいことなのか、ただ見かけのよさにひかれていいと思っただけではなかったかと、もう一度考え直してみました。そしてその結果、この道を選びました。就職するとき普通のオーエルのようではなく、自分の持っている力をいかした仕事がしたい、そして家庭にはいったとき、家中を自分の手作りのもので飾りたいという夢を実現したかったのです。そのためにある美術研究所に通っているのですが、いいアイデアが浮かばなかったり、先生に「これじゃあ何がしたいのかかわからんだろう。」と言われるなど、苦しい時、自分がいやになってしまう時がたくさんあります。しかし、自分で新しい発

見をしたり、満足のいく作品ができた時は、言葉では言い表せないほどうれしいものです。あるとき、研究所の先生が、「みんなはどれも上手に描こうとしすぎる、そうじゃなくて下手でもいいから、思いきり、あきらめないで一生懸命描いた方がいい。そうすれば必ずいい結果が出るし、相手に気持ちが伝わる。」と言われました。これは絵だけでなく、勉強にも何事にも同じことがいえると思います。

この夏休みは、私達受験生にとっても辛いと思いますが、私は『受験』という二文字に負けられないように一生懸命、あきらめずに残りの夏休みを有意義に過ごしたいと思っています。

先生も、お体に気をつけてお過ごし下さい。

かしこ

八月四日

〇〇〇〇〇

高木徹先生

⑧ スピーチについては、次の章で詳しく述べるが、前年度同様、大変に好評であった。次年度以降も、本校の表現指導の大きな柱として位置付けて行きたいと考えている。

⑩ 2学期の前半に、かなりの時間をかけて小論文を書かせた。題を、「自然破壊」「食糧と資源」「科学の発達は人間を幸福にするか」「世界平和と日本」「テレビの功罪について」「教育の場における競争について」の六つの中から一つ選び、構成メモ→下書き→推敲→清書という手順で、500～650字という字数制限で行った。構成メモのところでは、まず文章全体の要旨と、段落ごとの要点を書かせ、それを数師に見せて合格したものから下書きにとりかかった。下書きから先は、①の日記と同じように指導した。次に一例(構成メモと下書き—原文は縦書き)を掲げる。

教育の場における競争について

高3C女子

〔構成メモ〕一、私にとっての教育の場における競争

二、私以外の人を見渡してみても

三、学歴社会について

四、まとめ

教育の場における競争は、学歴社会の、典型的な、表れだと思ふ、しかし、私は、この社会にすっかり慣れてしまっているせいか、特別に苦痛を感じたことがない。私は元来、のん気な性格なので、順位となって表わされる成績というものを、むしろ、おもしろく思うことさえある。このこと自体が、不自然なことだと思ふ。

他の人はどうだろう。この競争に振り回されては、いないだろうか。学校の成績が全てのように、思い込み、順位が下がったと言つては、動揺している人々。一流大学と言われるところに入学するため、小学生の時から塾通いの毎日を送っている人々。私自身、成績が下がれば、多少、落ち込みもする。やはり、誰もが、学歴社会のもたらした、この競争に侵されているのだ。

学歴社会は、最終学歴のみを問題にする。たとえば、どんな理由があろうと、中卒の人、高卒の人、三流大学を出た人と、その人にあった扱いしかしてくれない。就職の募集要項には、必ず、「高卒以上」、「大卒以上」という資格が書いてあり、それによって泣いている人も、たくさんいることだろう、この場合、家庭の事情で義務教育しか受けられなかった人は、どうなるのだろうか。

勉強は、人に強いられてするべきものではないと思ふ。学歴重視の社会だから、やらなければならないものであってはいけないと思ふ。人には、それぞれ持って生まれた物があるのだし、それを競争によって順位づけてはいけないのではないか。学歴重視のこの不平等な社会を正すためにも、教育の場に競争はあってはならないと思ふ。

⑪ 一人またはグループで、教科書の中から、あるいは教科書外から好きな教材を取り上げ、それについて調べてきたこと、考えてきたことの発表を中心にして、生徒による授業を行った。事前に、教材名・研究方針・研究内容を用紙に書かせて提出させ、研究発表(授業)の進め方については、それぞれの生徒にまかせた。発表する側は、教師も知らないことまで調べてきた生徒あり、うまくまとめた板書をする生徒ありと、かなり充実していたが、2学期の後半から3学期にかけてという受験を控えた時期であったので、聞く側の態度に問題が残った。この試み自体はおもしろいものであったが、実施する時期は検討を要するであろう。学年末の生徒の感想を読むと、賛否がかなり分かれていた。「研究発表は、自分の興味を持った題材の中から、その作品を深く掘りさげてゆくの、とても良かった。作者が、その作品を作った環境、どういう意味を込めて作品を書いたのか、筆を執る動機など、いろんな角度から、その作品や作者を深く追究することができて……」という肯定的な意見がある一方、「どうして私達が先生のおねごとのような事をしなければならないのか、と思ひました。」とこう否定的な意見もあった。

⑫ 59年度は「私と名大附属高校」という題の作文で学年末テストを行ったが、評価する時間の余裕がなかったので、60年度はそれを2学期の期末テストに回し、試験時間50分で500～600字という字数制限で書かせ

た。

⑬ 学年末テストの時間を利用し、アンケートを行い、「国語表現」の授業に対する感想・意見を400字以上で書かせた。これについては、後の反省のところで述べる。

なお、60年度の評価について少し触れておく。60年度の評価に含めたものは、①の日記、③の作文、⑥の要約、⑨の手紙、⑩の小論文、⑫の作文、の六つであり、前年度に比べると、「国語表現」らしい評価になってきたと言える、ただ問題点としては、いずれも「書いたもの」であり、「話すこと」は少しも評価に加えられていない。今後は、とりえずスピーチをどう評価するかということについて考えて行きたい。

4 スピーチ

前年度の国語表現の授業において、好評だったので本年は、1学期の途中から毎時間2人ずつ、授業のはじめにスピーチを行なった。全員が終わったのは、2学期も半ばを過ぎていた。年度末の調査から、生徒のスピーチに対する意識をみると次の様になる。

スピーチに対して、どの程度興味・関心がありますか。

	59年度			60年度		
	男%	女%	計%	男%	女%	計%
非常に強く感じる	21	13	17	10	9	9
かなり感じる	23	41	32	40	43	42
どちらともいえない	20	25	22	31	33	32
あまり感じない	23	11	17	15	10	12
ほとんど感じない	13	10	11	5	4	5

前年度と比較して、「感じない」が、17%に、減少している。スピーチが「国語表現」の授業内容として定着したといえよう。また、2年目ということで、テープレコーダーで録音したものを導入に使ったり、スピーチの題目や下書きメモ等を参考にさせた。B組の題目は次の様である。

- 1 リーダーシップについて
- 2 自然科学の発達について
- 3 現代音楽とベートーベン
- 4 「言葉と文化」の関係について
- 5 ネコを飼おう
- 6 僕の家族と四人兄弟
- 7 元素について
- 8 家族について
- 9 嘘と冗談
- 10 クマヌズミが天下奪還
- 11 世界の格闘技
- 12 第5世代コンピューター
- 13 ハイテク産業について
- 14 僕をとりまく環境たち

- 15 登校中に会う変な奴ら
- 16 中高年と若者
- 17 生きがい—テニス—
- 18 現代高齢化社会とその実態
- 19 道の途中で、(地球の資源)
- 20 掃除から学んだこと
- 21 子供の遊びについて
- 22 犬の話(柴犬の10年)
- 23 私のすばらしい体験(留学)
- 24 ダイエット
- 25 スポーツのはじまり
- 26 血液型について
- 27 国際理解について(イギリス)
- 28 おはしの使い方
- 29 飢餓と飽食
- 30 私のおすすめ映画……マスク……
- 31 人口問題
- 32 生きること
- 33 大切なもの(松葉づえの五週間)
- 34 「江分利満氏の優雅な生活」をよんで
- 35 バスケット部での思い出
- 36 継続は力なり……書道11年
- 37 「物の存在」とは
- 38 ペットについて
- 39 私の夢—ピアノ—
- 40 月の魔力と月物語
- 41 物事の考え方について
- 42 私の文化的思考—サザエさんから—
- 43 「日本語」について
- 44 “Santa Clausからの手紙”
- 45 ろうあ者と手話

次に、下書きメモの例をあげる。二つとも、内容、話し方、態度ともに良いスピーチであった。

下書きメモ<29 飢餓と飢食>

私は母に「今日の夕食に何が食べたい?」と時に聞かれることがあります。私は「別に何でもいいよ、特にこれといって食べたいものなんてないしな〜。」と返事をすることがあります。私はこんな時、ぜいたくになったものだと思います。

そして、スーパー・マーケットへ行けば、ありとあらゆる種類の食べものが並べられて、一体どれを買ったらよいか困る事がしばしばあります。

皆さんも同じような経験があるでしょうか。

一方、世界人口のほぼ4分の3が生きている「南」では、1時間に1500人もの子供達が餓死しつつあるのです。この光景を皆さんは想像できるでしょうか。

アフリカでは多くの人々、特に小さな子供達が

ゴムまりの様にふくらんだお腹をかかえているのです。彼らは食べ物と水がないゆえに、力が出ず、子供らしく遊ぶこともできず、ぼう然と座っているそうです。

皆さんは多分、アフリカのやせこけて、飢えた人々が非常にかわいそうで、しょうがないと思っていることでしょう。確かに私も彼らがかわいそうでなりません。

しかし、最もあわれむべき者は、私達ではないでしょうか、なぜなら、現代日本人が、和風、洋風、中華風のおいしさをしりつくし、ぜいたくな舌をもつようになってしまったので、食べ物にたいするありがたみと最高の満足感を失いつつあるからです。

ではショッキングな数字をあげてみましょう70億ドル、皆さんは、この数字を何であると思えますか。これは、日本とアメリカのような北半球の富める国の人々たち、特に中産階級の女性が、一年間にまだ十分食べられるものを、お金で換算した値なのです。この70億ドルの大半は家庭の中から出る食べ残しだそうです。

もしも、今、70億ドル分が、ムザムザと棄てられず生かされるなら、少なくとも全アフリカの飢餓の問題が片づくどころか、今後飢餓難民を出さずにすむことができると思います。

ですから私達が食べ物の価値をしっかりと把握する必要があります。そして私達は日本が穀物戦略によって飢える国になる可能性があることを認識しなくてはなりません。

「食」はすべての精神文化において大きな意義をもっています。その「食」が全人口の30%で富む北と全人口の70%で飢える南とにきっぱり分けられている現代では、荒廃と不安と脅威が忍び込んでも仕方ないかもしれません。

しかし、今私達が出来た事といえば、飽食と飢餓の問題を考え、食べ物の好き嫌いをせずに、私達に与えられた物に感謝することだと思います。
下書メモ<33 大切なもの(松葉づえの五週間)>

怪我して、5週間たって、やっとびっこひきながら自分の足で歩けるようになりました、この5週間、いろんな人たちに心配をかけました、と同時に見も知らない人からいろんなことを学びました、今日はそのことを少ししゃべってみようと思います。

タクシーの運転手
月曜3時の待合室

さて、年度末の調査から、スピーチに関する感想・

意見をみてみると次の様である。

A組(男子)スピーチなどにおいては、人を注目させておく難しさが分かったことなど、学ぶ所が大いにあった。

A組(男子)スピーチの時は楽しかった。自分がやるのはあまり気がすまないが、人がやっているのを見ると、感心する事があり、笑えるところあり、なかなかいいものと思った。

A組(女子)ためになったと思うことは……他にはスピーチなどで、みんなの前で話すという機会のない私にとっては、とても勉強になった。なかなか大きい声はだせるものではないとこうことがわかったし話すスピードもなかなか難しいんだなと思った。

A組(女子)授業で一番心に残っているのは、一人一人のスピーチですね。一人一人とっても個性が出ていて、自分の夢や日常の出来事など、いろいろな分野にわたっていて、ほんとに楽しかった。人のスピーチを聞くのは、たいへんおもしろく興味深いものだが、いざ自分がスピーチをやるという時は、もう足がカクカクで、ほんとにあがっちゃってしようがありませんでした。

B組(男子)人がスピーチをしている時、クラスみんなはとても真剣に聞き、おもしろい所ではみんなであらう……というあの雰囲気は僕はたいへん好きでした。

B組(女子)表現の授業において、もっとも良かった事は、スピーチや生徒自身による研究(発表)授業であったといえる。何故ならこれらは私達が「受け身」でなく、「参加」した授業内容であったからだ。

C組(女子)スピーチは私にとってたいへん興味深いものでした。クラスみんなの意外な一面を見たような気がしました。声の大きさ、姿勢、説得力など聴者をひきつけていく魅力は何なのか、勉強させられました。

C組(女子)スピーチは、自分の言いたいことをどうしたら聴衆にわかりやすく伝えることができるかなど考えるのだが、これは、スピーチだけでなく、日常生活の中でも必須となるものであろう。それを練習できたことはいいことだと思う。また、スピーチを聴くことによって、話し手の趣味、本音などがくられた性格が認識できたので、よかったと思う。

「国語表現」におけるスピーチでは生徒自身が体験することによって、「話すこと」への興味、関心を高めることができたことと評価できよう。来年度以降、継続して行いたい。また、反省点と今後の課題として検討したい事は、(1)スピーチと小論文を結びつけた指導は出来ないかということ(2)スピーチを全校行

事（生徒会主催スピーチコンクール等）にして、発表の機会をつくれぬか等である。

5 60年度の成果と今後の課題

60年度末に、59年度末と同じ質問項目でアンケートを行った、その一つをここに載せ、59年度と60年度とを比較してみる。

この科目の学習によって、自分の言語活動に対する認識が深められたり、態度や能力が向上したり等の成果があがったと思いますか。

	59年度			60年度		
	男	女	全体	男	女	全体
はい	20	31	26	30	39	34
いいえ	48	23	35	27	13	20
わかりません	32	46	39	44	48	46

(数字は%)

上の表から明らかになるように、60年度においては、「はい」と答える生徒が増え、「いいえ」と答える生徒が減っている。これは、59年度の実践や反省を踏まえ、59年度に蓄積された資料を有効に利用して、「国語表現」らしい授業を行ってきた成果であると自負している。が、59年度に比べて多少は改善されたとは言え、今後、「国語表現」の学習指導を充実させる上で困難な課題が、まだいくつも残されている。60年度末に生徒の書いた感想・意見の中にも、我々教師側の問題意識と重なってくるものがあり、それらを引用しながら今後に残された課題について述べたい。

(1) カリキュラム上の問題

本校では、高校3年で2単位の「国語表現」が必修になっている一方、高3の理系では古典の授業を望む生徒もいる。また、多くの生徒にとって「国語表現」は受験に関係のない科目であり、この科目の意義や必要性を認めながらも、受験のさし迫った高3ではなく、高1・高2でやってほしいという声が多かった。では受験に小論文などが必要な生徒が満足しているかというと、必ずしもそうでなく、「もっと小論文を書かせ

てほしかった。」という声が多く、授業に物足りなさを感じたようである。このように様々な生徒を抱えて、今のカリキュラムを継続して行くことには困難を覚える。それでは、高1・高2で行えばよいかというと、スピーチにしても小論文にしても、高3で行っている時ほど内容的に深いものは表現できそうにもないという、また別の問題が生じてきて、簡単には解決できない問題であることを感じている。

(2) 教師の作文処理能力

小論文の回数をもっと増やしてほしいとのぞむ生徒がいるにもかかわらず、教師側としてはこれ以上書かせたら、処理しきれないのが現状である。また、添削についても、「自分の悪い所は細かに修正してもらいたい」と、さらにきめの細かい指導を望む生徒もいるが、それにも限度がある。40数名の生徒に対し、ひんばんにきめ細かな指導を行うことは不可能であると、教師側は考えているが、そのあたりが生徒側で不満として残っているようだ。この問題を解決するには、一クラスの人数を今の半分以下にするしかないと思うが生徒の中にも「表現の授業は45人を一度にやるのは無理ではないかという気がする。理由は他人のスピーチを聞く時間が多過ぎること、45人の作品全部指導するのは困難ではないかと、思う。だから多くても1クラス20人位にして欲しい。」という意見を書いている者もいた。

(3) 「話すこと」の指導と評価

話者が一方的に話すだけのスピーチは、「話すこと」としては初歩的なものであり、それだけで「話すこと」の指導が終わってしまっは不十分であると考える。60年度は、スピーチの発展として、研究発表を試みたが、今後は討論・面接なども授業の中にとり入れて行きたい。

もう一つの課題は、59年度も60年度も、「話すこと」が評価に加えられていない。「国語表現」の評価が「書くこと」の評価だけでは、片手落ちであり、とりあえずは、スピーチを評価する方法を模索して行きたい。